

1) ミミナグサ 日本を含む東亜の暖温帯に産する個体群は歐洲の母種よりも短命(1年生が多い)と見られ、包葉は全く草質で膜質縁ではない。これを北半球に於ける地方的変種と考え学名を整理した。中間形の存在は原教授が既に 1941 年に記しておられる。

2) ヤンバルハコベと 3) *Drymaria villosa* Cham. et Schlecht. インドで今日まで *D. cordata* Willd. として扱われて来た植物は上記の 2 種を含むことが分った。但し後者は恐らくインドネシア地域を経て 19 世紀末尾の頃に移入されたものであろう。

4) *Polycarpon indicum* Merr. 従来 *P. Loefflingiae* Benth. et Hook. f. と呼ばれ、旧熱帯広布種と目されて来た。然し少くともインド産のものに関する限り *P. indicum* Merr. の学名を当てて置くのが良い。新熱帯にも似た種類を産するので、全熱帯地方からの資料を集めての再検を必要とする。

5) *Pseudostellaria cashmiriana* Schaeftl. ワチガイソウに似た本種はカシュミール以東に未報告であったが、今回シッキム産を報告する。然しシッキムにワチガイソウがあると言われているので、両者は此の地域で重複分布をすることになろう。

6) ツメクサ シッキムに広く分布するらしい本種はチベット東部から移入したものであろう。アッサム東部にも産するがこれは雲南、四川省の辺から入ったと想像する。

7) トヨハラツメクサ 筆者の 1960 年の発表に用いたインド北部高地産のものはすべてチシマツメクサであった。然しダージーリン市内での採集品に真のトヨハラツメクサがあった。街路の敷石のすき間に生えていた由で、比較的近時の移入品であらう。

8) ヒメコハコベ(一名アミバハコベ) 半世紀の間台湾特産と考えられて来た本種がシッキムに見出された。採集品には 2 つの形を区別出来るが、これは恐らく変異の両端を示すものかと思う。

9) ナガサワハコベ 長年使われて来た *S. saxatilis* Buch.-Ham. (1825 年) の名には Scopoli の先行名(1772 年)があるので、*S. vestita* Kurz (1873 年) を起用する。これは大きく生育した少毛形に対する名であり、*S. saxatilis* は小形の密毛形に対する名である。

□Dodd, J. D.: **Form and function in plants**, pp. 233. The Iowa State University Press, Iowa, U.S.A. (1962) \$6.50. アイオワ州立大学で植物形態学を講義している淡水藻類の著者が 20 年の経験を生かした教科書。緑藻からコケを経て高等植物という形態進化を基礎にした一貫性で一般植物学のすじをわかり易くさせようと試み成功している。「Green cell」でクラミドモナスから入り、細胞の構造をのべ、「生殖」で再びクラミドモナスへもどって配偶体上に次第に座を占める孢子体という見方で高等植物へ及ぼし、種子の発芽で終る。次の「減数分裂、遺伝及進化」は短かいが、次の「陸上の生物」で瓦斯交換とそれに伴う構造の進化として原始高等植物に入り、「植物体の生長と分化」で高等植物の内外の器官と構造を論ずる。そのあとつけ足的に菌類の形態を添え、最後に Tippo と Bold との分類系を比較して終る。写真が美しいしそれも発生という眼で用意されているのはよい。(前川文夫)